

## 四万十川が育てた生活文化

岡 並木

### 串団子のイメージ

私は、昨年六月末から四、五日かけまして、四万十川（しまんと）を初めて歩いてみました。四万十川は、地図（図1）をご覧になって水源と言われる、右上の不入山（いらすの山）からくねくねと河口まで下がって一九六キロメートル、その割には高低差が無く、このことがこの四万十川の問題を考えるキーになると思うのです。

私が歩きましたのは、不入山から北へ下がった家地（いえぢ）川ダムから下流の方の中村市にあります赤鉄橋、そこまでの約百二十kmを見て参りました。ずっと回って感じたことは、四万十川は串団子のイメージなのです。

どういふことかと申しますと、川を串としまして、五十近い集落が川を挟んで成立してきていますが、川に沿っての生活圏の拡がりはなく、川を挟んで集落同士が向かい合っていることも、集落が右岸にあつて、左岸に畑を作る場合もあります。川を挟んでの生活圏であつて、それが団子のようなイメージな訳です。それで川を挟んでの生活ということはその両側を結ばなければいけない、その結んできたのが舟です。したがつて四万十川それぞれの集落に欠かせなかつたのが、対岸に通うための舟であり、またその舟は釣りにも使つております。

そのように川を渡りながら四万十川の沿岸の



図1 四万十川の地図

生活は成り立ってきました。それで四万十川は昔から「渡川」（わたり川）とも呼ばれてきたのです。「渡川」という呼び方は、まさに「渡る生活」を物語っているのではないかと、思います。

写真1は中村市の赤鉄橋の上から上流方向を見たもので、この辺は川幅が広く三、四百メートルはあると思いますが、中村市内でも、四万十川の水は澄んでおります。日本一の清流と言われますが、なるほどなと思います、のぞき込んだものです。この赤鉄橋は四万十川では一番古い、一九二五年の鉄橋です。ちょうどその十年前に、一部は渡し舟、ロープに滑車を通してロープを引っ張りながら渡っていた舟なのですが、洪水の時に転覆いたしましたして、十一人の女生徒が亡くなりました。それがきっかけになって鉄橋を作ることになりましたが、ただ問題がありました、それは追々お話しすることとします。

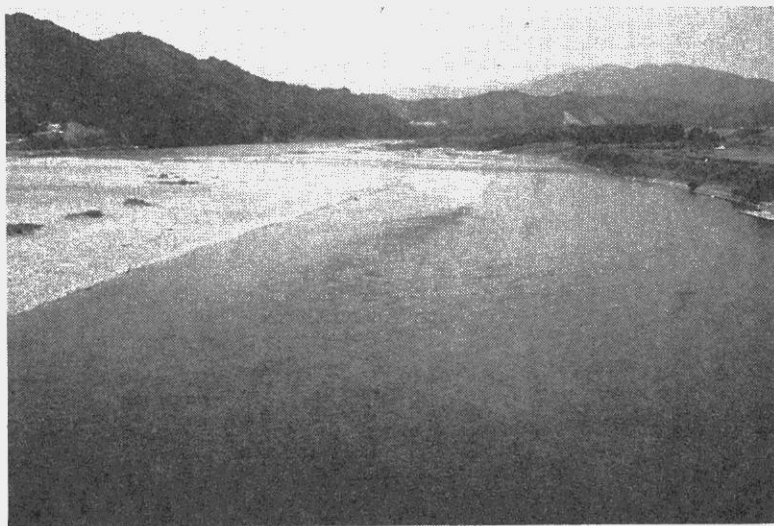


写真1 中村市内から四万十川を見る

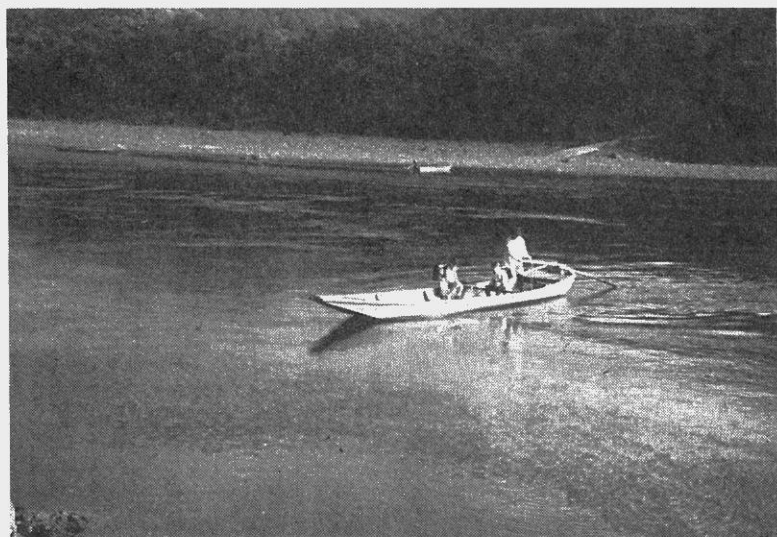


写真2 勝間の学童渡し

### 渡し舟で通学

写真2も中村市内ですが、ここらは川幅百メートルほどになっています。舟が見えますが、この舟は今、四万十川に唯一残ってきた渡し船で、二〇〇一年まで学童の登下校に使われてきました。朝七時少し前に取材に参りますと、まだシーンとしており、鶯だけがあちこちで鳴きながら谷を渡っておりました。左岸は中村市の久保川という集落、反対側は勝馬という集落で、この二つの集落は昔から集落の名前は違いますが、渡し船で一体の生活圈として歴史を歩んできました。それで久保川の学区は勝馬の学区の中にあるのです。ですから久保川の子供たちは昔から勝馬の学校に通うのに渡し船を使っていたのです。やがて七時半が近づいてまいりますと黄色い救命衣をつけた小さい男の子、しばらくして女の子がやってきました、最後に女性の船漕ぎの人がやってきました、七時半ちょうどに岸を離れました。舟は最初は、

川下に一度行きかけまして、それから上流に向けて漕ぎだします。この最初は流れに逆らわず一寸行く、それから上流に行くのが川の流れを越す時の一つのコツみたいですが、やがて対岸の船着き場より一寸上流側まで行くのです、そしてまた方向を変えまして船着き場に着けます。

子供は一九九九年の春、二人卒業し、一人入学しまして、ご覧の二人になりました。小学校は百十数年の歴史を持つている学校なのですが、今から十五年位前までは百人近い子供がいたのですが、今では今では全校で八人なのです。その中の二人が久保川から舟で学校へ通っているのです。船先を岸にぶつけて着岸しますと、子供達はすぐに上陸し、かなり急な坂道、竹やぶを越えて歩き出します。学校まで約一キロメートルの道を二人で歩いて行くのです。学校は道路を挟んで学校と運動場があるのですが、私はまだ先生も見えないし、学校も始まらないし、門の前でしばらく待っていた

のです。そうしたら来る子供達が皆、僕を全然知らない筈なのに、一人残らず「お早うございます」と挨拶をします。ビックリしました。

やがて八時になると、鐘が鳴りまして子供達が一斉に運動場に出てまいりました。八人全員そろいましたら、突然スピーカーから音楽、「こんな曲を学校でやるの」と言うような、トンネルズの「がらがら蛇がやってきた」の曲が流れてきまして、それにあわせて運動場を回る、それで朝の体操は終わり。一度校舎に戻りまして、朝会、朝会は毎日テーマが変わります、私が行った日は火曜日で草取り朝会、草取りをします。日によっては発表朝会というのもあり、これは何かのテーマを与えてもらって子供達が発表するというものです。

今お話した通り、八人しか子供たちがいない。二〇〇一年には遠くの学校と合併の予定になっていました。校長先生が、こういう風に仰って

りました。「確かに子供達は同級生たちや前後に先輩後輩が沢山いて伸びていく。しかし学校が勝間のように小さいと、一人一人が発言出来る良さがある。私どもの学校の子供達を見ていくと、段々と自分で物を考えていく子供に育っていく。だから大きな学校の良さと小さな学校の良さとの間でそのどちらが良いのか、私は悩んでいます」と、仰っております。その校長先生がある子供の作文を見せてくれました。それを読んで私はビックリいたしました。ご存知のように四万十川の一つの景色として沈下橋(ちんかばし)というのがございます。洪水の時に沈んでしまう橋です。その沈下橋が一時は本流だけで四十近くあったのですが、段々減りまして、今は二十幾つまでに減りました。インターネットなどで沈下橋についての情報を見ていきますと「沈下橋をなくすな」とか「沈下橋を惜しむ」。つまり、なくすのはもったいない、という捉え方をしている方が多

いのです。私もそんな思いをしていましたが、その子供の作文を読みますと「沈下橋はいやだ」、「沈下橋はいらない」と書いてあるのです。

どう言うことかといいますと洪水が起こります。それで水が引き始めるとすぐ集落の皆が総出で、沈下橋の上に溜まった泥をどけなければいけない。子供も動員される。それが大変な作業らしいんですね。ですから沈下橋を惜しんでいる人たちは、そういう沈下橋のそこに住む人たちの生活の苦しさというか、そういうものには気が付いていなかったということなのです。私もその作文を読むまでは、「ああ、沈下橋にはそういう側面があるのだなあ」と言うことを全く知らなかったのです。

#### 沈下橋と舟運

この沈下橋は古い歴史があるように思われているのですが、実際は四万十川に作られ出したのは

昭和三十年代の半ば以後です。四方十川で今、一番古い沈下橋は源流に近い一斗俵橋で、これが一九三〇年代、即ち戦前に作られている数少ない沈下橋ですが、しかし大半の沈下橋は昭和三十年代から四十年代の半ごろにかけて作られた、つい最近のものなのです。沈下橋はそもそも日本では高知県で最初に作られました。これは大正時代に高知市の技師が中国へ行きました、中国の西湖で石の沈下橋を初めて見まして、彼はそこでこの洪水で沈む橋は橋脚も低くて済むし、建設費も安く済む、これを是非取り入れたいと考えました。そこで当時の内務省に何度も通ったそうです。はじめはバカにされ相手にされなかったのですが、とうとう認可を取りまして、一九二七年に高知市で最初の沈下橋を造ったのです。これが今残っているのか私は知りませんが、それつきりで後はしばらく造られなかったのです。一九三〇年代に、先ほど申し上げた一斗俵橋などの沈下橋が、四方十

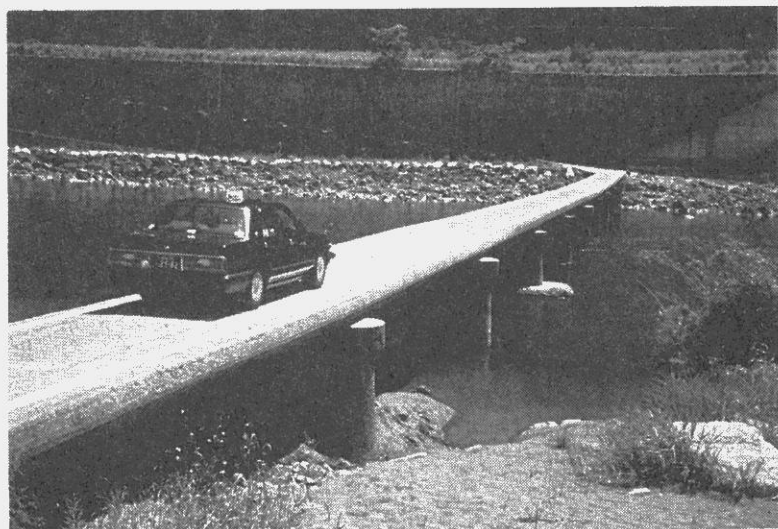


写真3 長生沈下橋

川に造られたのです。

写真3は西土佐村の長生橋(ながおい橋)で幅が二・八メートル、橋によつては二・四メートルなんてのもありますが、これは二・八メートル、どうやら小さい車が走れる幅なのです。往きはタクシーで運転手は平気で渡るのですが、帰りは歩いて渡つたところ、怖いなんのつて、立ち止まつて川を眺めるなんてゆとりは全くありませんでした。ですから遠くの一点を見つめながらそりそりりと百二十メートルありましたが、やっとこれをわたりました。ここらで暮らしている人は偉いなあと感心いたしました。

ところで沈下橋がなぜ下流ほど普及しなかつたか、つまり下流と言いますのは西土佐村の江川崎(えかわさき)から下流のことですが、ここに沈下橋が造られる時期はずつと後にずれこんでいます。どういふことかという江川崎のあたりから下は岩礁が無くなつてきます。それで大きな

舟が航行できるような条件をここから下流は持つて居るのです。それで二十世紀はじめに、舟母(せんぼ)という独特の舟が生まれてきます。これは四万十川の他の舟より大きいから舟の母だからと言ふんだとか、薪が千把積めるからだとか、説はいろいろ有りまして、語源ははつきり掴めません。この舟母が一九四〇年代の終わり頃から五〇年代の半ばに段々と消え始めます。写真4は、昨年四月に復元されて観光用に動かし始められました。長さ十三メートル、幅二メートルで、四枚張つた帆が独特のものでして、風が無い時は櫓で漕ぐのですが、これが二艘、上り下りを始めたのですが、(図1で見ても)一番長い三百メートルの佐田の沈下橋から上には行かれないのです。帆がつかえて、この手前の河原で引き返えさざるを得ない、これから先は行けないのです。つまり沈下橋が増えたと言ふことは、舟母の動きがなくなつてきたと言ふことで、舟母の動きを無くした



のは、舟母に変わる川沿いの輸送の動脈として新しく生まれたいトラックです。つまりトラックが段々普及して、その方が効率が良いということでも舟母から荷物が奪い、それが舟母を衰退に追い込み、舟母が無くなってきた。そこで沈下橋が渡し船に代わり生まれて来る、色々なものが絡み合っているのです。

ですから沈下橋が出来たということは、この山奥の方にまでトラックが入りこみ始めたということでもあるのですね

### 舟母の暮らし

江川崎のすぐ下流側の口家内（くちやない）に集落がありますが、舟母が西上佐村に一番多かった時には七十二艘あったそうですが、その中でも口家内には非常に沢山の舟母があった。というのは口家内の左側に黒尊川（くろそん川）がありますが、ここは全国の炭の産出量の二割だか三割を

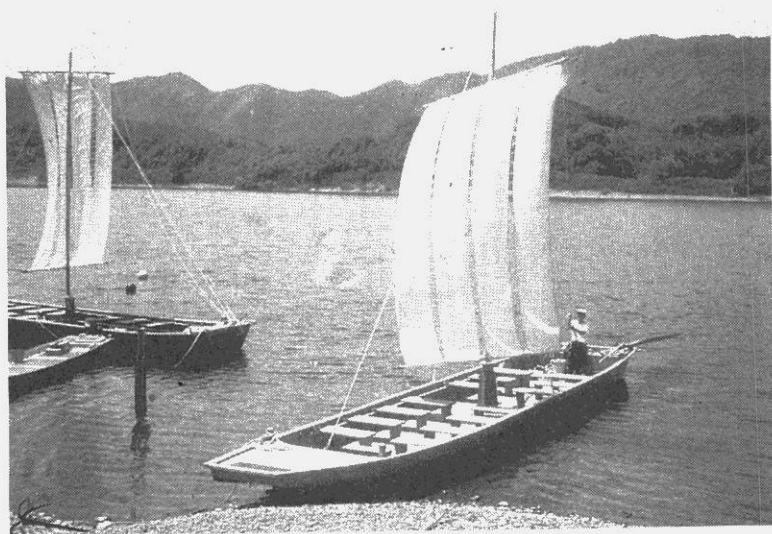


写真4 復元された舟母

占めていた、その位良い炭がここから出ていた、ということでも黒尊川を舟が上り下りしていたのですがこの黒尊川も、それから先ほどの江川崎から上流も岩礁が非常に多いということで、高瀬舟、これは全国方々に多いのですが、ここのは少し違うのです。岩礁が多く、これ乗り越えるために高瀬舟の底に櫂のそりを履かせたのです、それから舵を取る人が舳先と後ろ、前後で漕ぐという独特の舟がここに育って行きました。

口家内に「四万十 川がたり」と言う本を著した人がいます。野村春松さんという人ですが、長い間、ここで暮らしていてもう八十歳になります、その人が「舟というのは、流れによつて造られるものだ」ということを言っております。つまりそれぞれの海、川、湖沼にそれぞれの適した舟が、昔からあつたのだと、そういう言い方をしております。四万十川で一番長い佐田の沈下橋は、長さ二九三メートルですが、この橋のたもとに

「川」という喫茶店があり、その女主人に会いました。この女主人は、昔、ご両親が、舟母を持つていて、炭俵を河口の街へ運ぶ暮らしをしていました。子供だった彼女は、いつも一緒に舟母に乗っていたそうです。そのひとの話によるとまず口家内から朝出ると、河口の港に夕方着くそうです。まず炭俵をおろして、すぐまた上り始めるのです。赤鉄橋のあたりに幅広い河原があつて、そこには河原千軒という小さい街が出来ていて、舟母の客を相手に食べ物や飲み物が用意され、また舟母の船頭さんが何か買って帰る、そういう商いをする店がいっぱい出ていて、一緒に乗ってきた子供達は着るものや、お菓子を買ってもらつたり、とても楽しみだったそうです。その河原千軒の一寸、上の所に、舟をもやつて、舟の中でお母さんが炊事をして、それを皆で楽しく食べたということなのです。それで翌朝上りはじめ、風があれば帆を張り、進んだのですが、風がなくなるとお母

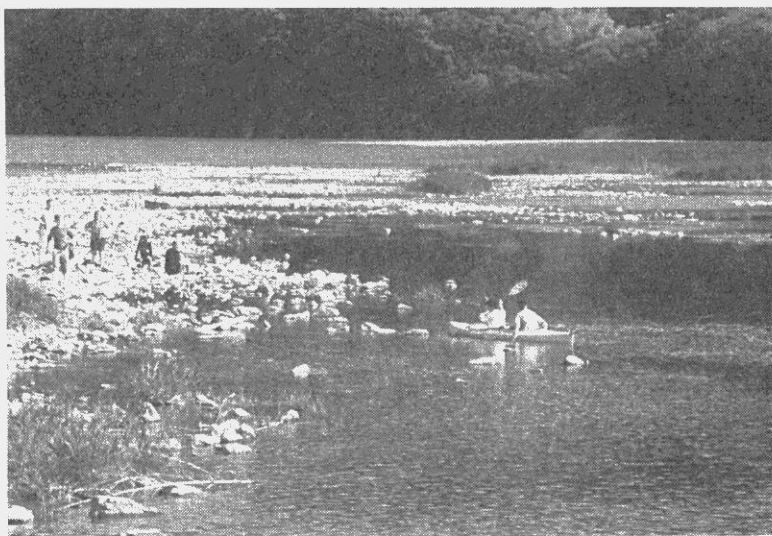


写真5 洲で遊ぶ

さんが舟をとび降りて、舟を引っ張った、その河原は写真5のように左右交互に洲が出ているのですね。ですから片っ方の河原が終わると舟に乗って、また反対側の河原が近づくと舟を降りて、舟を引っ張る。それで河原には踏み固めた道がついていた、そうやって口家内にだいたいの場合、夕方には着いたと、そうでない場合は一晩泊まったそうですが。その女主人が言っていました、「私も引っ張ったことがある。そうしたら意外と軽かった」と。

こういうふうに舟母が活躍した時代があったわけです。炭俵を船母に積むまでは、上流から江川崎まで運んでくる、あるいは黒尊川の上流から高瀬舟で口家内に運んできて舟母に積み替える、帰りの荷物はどうしたかは、あまりはつきりしません。が例えば、上流で紙をすく時に必要なわらびの粉を積んで帰った、という記録は残っているのです。

## 四万十川の「ダム」

大正町の郷土資料館には昔から暮らしに使われた舟があります。もちろんモーターなどは付いておりません。江戸時代から使われてきた舟で、これで川を渡つて、漁をしたりしていたのです。ところが漁が大変な不漁になつてきまして、一八四四年には、これは農水省の調べで、鮎が九八九トン採れていた、それが九六年度には、六十%減り、三九五トンになりました。また鰻は、八四年には二一五トンあったものが九六年には僅か三五トン、つまり八四%減つてしまつた。数字はありませんが、その前からどんどん減り続けていたのです。

それで漁をするための舟も、段々と減つてきて、今は四万十川で、舟といえばカヌー、遊びの舟がかなり増えてきています。

(図1で)家地川ダムから十キロメートルほど下つたところに「森さんの家」があります。この

付近の沿岸の漁師達は、魚が減つてきた一番大きな背景の一つにこの家地川ダムを挙げています。このダムが造られたのが一九三六年、つまり当時は戦争中で有無を言わず造りまして、四国電力が四万十川とは全然関係がない下流の伊予川に水を落とす発電所を造つた。発電所を作るためにこのダムを造つたのです。ところが存じのようにダムというのは、建設省の定義では高さが十五メートル以上ですね。ですからお役所の方はこれを堰堤といい、ダムとはいいません。しかし地元の人たちはこれをダムと言っています。お役所はこれを地名から「佐賀堰堤」と呼び、地元の方は「家地川ダム」といつているのです。写真6でダムの上の方は、湖のように広く、水が一杯貯まつていてとても四万十川とは思えない位、水があるんですね。

水門ですが、普通は四つの内、一つだけしか開いていない、四つ開けることは滅多になく、十月

から二月までの五ヶ月間は一滴の水も落としていない。これは何処へいくかという、四万十川

から水を引き佐賀の発電所で使ったあと伊予川に落とす、つまり水が、四万十の本流には戻らない。独特な発電所でもあるのです。それで四万十川の上流から来る水の三十%が発電に取られている。その契約の更新が三十年に一度でして、二〇〇一年の四月がその契約更新の年に当たりました。それで地元では沿岸の西土佐村までの町村がダム撤去運動を行って、それで知事がその間に入りまして妥協案を出しました。内容はこれまでの契約更新期間三十年を十年にして十年ごとに見直すことにしよう、また十月から二月までの間も毎秒何トンかは水を出す、そういうことで申請を出した。四国電力側は、水は多少出すが、三十年に一度の更新は変えないと主張したのですが、国土開発庁が、結局知事の申請を受け入れまして、十年更新、また十月から二月に毎秒二トン近くの

水を出すということで最近許可を出しました。そういうことがつい最近ありました。

それで本来であれば水面の下に消えていたはずの洲が出てくる。写真7は森さんの家の近くですが、こんな岩礁が顔を出している。それで森さんに会いまして話を聞きましたら、「我々の若い時にはあんな岩礁は出ていなかった、この川は、とても歩いては、この付近で渡れなかった」と、それで「川の浅い所に入ると鮎でも鰻でもえびでも手で掴んで捕ることができた」と話しておりました。それでこの沈下橋の近くの一寸小さい沢を上ると森さんの家があり、非常に古い家で、山も沢も山持っておられ、この辺はみんな森さんの山ですが、全部、椎、檜などの落葉樹です。「ここらでは、自分の家では、杉は絶対植えなかった」と。森さんの家の応接室は水車小屋でして、そこで話を聞いたのですが、「なんとしてもダムをどけてもらわなければ、四万十川の清流は戻らないし、

魚も段々とれなくなる。それに加えて山を国など行政が人口の杉の森に代えたことが鉄砲水を増やすことにもなったし、魚も引き寄せる力もなくなった」と。そういうダムと山の変化、その両方を四万十川の管理から見た、衰退の背景として彼は言っておりました。それで先ほどの舟母が沢山使われていた口屋内はここから百kmほど下ったところなんですね。その口屋内の野村さんにもありました。野村さんも山のことをしきりに言っておりまして、落葉樹の頃にはその落ちた実を動物が食べにきたが、今では動物も出てこなくなったし、そして樅や檜が川面に影を落としている所には魚も付いていたが、その木がなくなつてそれも付かなくなつた。そして最後に一言「ダムなんて川端に住んだことのないやつが考えたことさ」と、ぶっきらぼうに言っておりました。学生時代にずっと野村さんの家に毎年来ては、一ヶ月くらい泊まっていた青年がいたそうです。その人が一昨年

の春、手紙をよこして「建設省に入りました。これから四万十川で学んだことを仕事に生かしていければいいな、と思つています」とあつたそうので喜んでおりました。

野村さんから聞いたのですが、口屋内より一寸下流、勝間の渡しの上に、一九六〇年代に七十メートルのダムを造る計画が持ち上がった、その時の知事、たしか溝淵さんと言われた、が一言「四万十川にダムはいらんよ」と言つたことでこの計画は撤回された、ということもあつたそうです。

### 足半と杖で渡る

それはともかく、この河口付近、中村の赤鉄橋のそばでまだ橋が出来る前、先ほど渡し舟があつたと申し上げましたが、その渡し舟が生まれる前、河原には足半（あしなか）と杖が置いてあつたそうです。足半と言うのは、日本では十三世紀ごろからある土踏まずのあたりまでしか長さのない

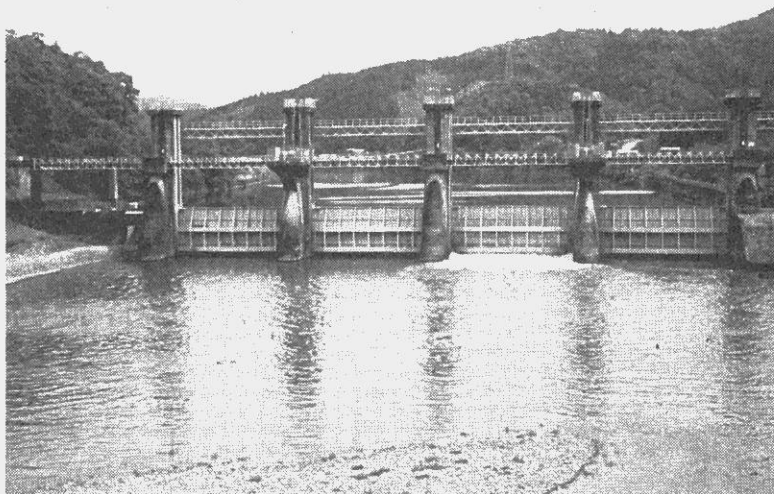


写真6 家地川ダム



写真7 露出した岩礁と半家（はげ）沈下橋

草履のことです。これは農作業に使ったり、戦国時代の戦争で突撃するとき兵隊達が履いていたもので、足半というのは踏ん張りが利くのだそうです。

それで川を渡ろうとする人はその足半に履き代え、杖をついて渡り、対岸に着いたらそこに揃えて置いていく。つまり足半が一つの公共の道具のような姿で、この河口に近い中村の町の河原で使われていたようです。しかし、中村市の郷土資料館に行っても誰も足半のことは知らないし、もちろん置いてない。野村さんが「四万十 川語り」の中で書いているので、野村さんに「足半はないですか」と聞いたらやはりないのです。だけれど「作ることの出来る人がいる間に作って貰おう。近いうちに頼もうと思っている」とのことでした。もっと上の方の集落で聞いてみると、やはり足半を使っているのですが、上流ですからとても川を渡るには歩いては渡れない。森さんも子供の頃に

は、親に作って貰って、学校へ通うのに使ったり、近所で遊ぶのに使っていたそうです。

ですからこの話は、足半の生かされ方として、下流ではそういう使い方をされていたということですね。

余談となりますが、大正町でおやつと思ったのは石の風車（かざぐるま）があつて、風の力で、モーターもないのに回っているのです。それを「へえー」と見ながら昔からの土佐大正町の市街に入ったら、JR予讃線の土佐大正駅がありまして、これが明治時代の駅ではないのですが、駅に時計があるのです。ヨーロッパでは、駅のシンボルは時計なのですが、日本の鉄道が始まった横浜、新橋、汐留駅には時計がない、イギリス人が指導したのに、これが不思議なのですが、日本で最初に時計が着いたのは大阪駅です。その時計がここにはあるのです。懐かしい風情の駅でした。



## トンボ公園とマイポ湿原

以上、大ざっぱな話でお耳を汚しましたが、ついでにお話したいのは、中村市内の河口近く、上流から見て右岸から一寸いきますと「トンボ公園」という、四ヘクタール足らずの湿地帯が残されています。これが今、日本で一番大きなトンボの公園だと言われています。そこへ寄ってみました。行ってみますとこれが全部落葉樹林で、囲まれた景色が広がっております。ここは全体で計画は五十ヘクタールのトンボ王国を作ろうとしており、現在はその一部分の湿地帯に、ガマの畑や、菖蒲の畑があったり、色々な形で使われており、ボランティアの作業でここまで進んできています。

ここは今から二十年前、十代の少年がトンボに関心を持ちまして、トンボの絵はがきを作り、それを売って、開発される前のこの湿地帯を何度も買い増して、こういうものを作りたいとの一念に

燃えたわけですね。その人の熱意にほだされてWWFジャパンが、その僅かな土地を買ってくれたのです。それが一つのきっかけになって段々に広がってきたのです。

写真8は黄色い花を咲かせるヒメコウホネです。写真9は花菖蒲にヤンマがとまっている所です。奥の方には椿の枝に青がえるがいました。

ここが実は市街から十分足らずなんです。それで思い出したのはラムサール条約に登録されている香港のマイポ湿原です。九竜の半島のずつと北の方、深せんとの境界付近にあって、何百ヘクタールという広さがあるのですが、ビックリしたのは香港郊外の住宅地がすぐそこに見えるのです。こんな町に近いところにこんな広大な湿原があるとビックリしました。

ここもWWF香港が管理をしております。シーズンには渡り鳥が何百種類と来る所ですが、マングローブと葦とで成り立っている湿地帯で、そ



写真8 ヒメコウホネのあるトンボ公園



写真9 花菖蒲とヤンマ

ここに板を渡して歩いて見学をするのですが、前もって予約をしていけば、誰でも行かれ、二十人単位でグループを作つて中を案内してくれます。場所によっては、鳥を脅かしてはいけなないと、狭い扉を立てて、その間を人間が静かに渡るようになっていたり、鳥を覗く小屋もあります。

湿地帯の中にある池では、ちようど香港返還直前の六月末の暑い時で魚が空中に跳んでいました。また奥にはこういう野生生物の教育センターがございまして、蔦に覆われていました。

ここは香港が返還になる前にラムサール条約に登録されておりましたし、WWWFが関係するようになつており、今も続けられていると思えます。この湿地帯の中では海老の養殖をしている漁師もいますが、それはそのまま置いてあります。ただ遠いのです。先ほど住宅が見える程近いと申しあげましたですけど、都心からだすと車で2時間ぐらいかかる、比較的近くに鉄道駅もありますが

そこからでもタクシーでかなりかかる。ですけれど、シーズンには一度行く価値はあるのじゃないかと思えます。

中村のトンボ王国ほど近くはないけれど、都会の近くに広大なこれだけのものが残されていたのだと、日本の干潟の問題を考えますと、彼らははるかに進んでいたのではないかと言う気がしてなりません。

それではこれで終わらせていただきます。どうも有り難うございました。

(二〇〇一年五月一九日)